

わか お まさ き
若 尾 政 希

学 位 の 種 類 博 士 (文 学)
学 位 記 番 号 文 第 216 号
学位授与年月日 平成17年5月12日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 題 目 安藤昌益からみえる日本近世

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 佐 藤 弘 夫 教 授 大 藤 修
教 授 仁 平 道 明

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、伝記的事実がまったくわからない謎の人物安藤昌益について、いかなる書物を読んでどのような学問を学んでいったのか、昌益の思想の母胎となった「思想的基盤」を掘り起こすことによって、昌益の思想形成の過程を丹念に跡づけようとするものである。この作業の積み重ねによって、昌益と既成の諸学問との格闘のさまが見えてくるに止まらず、昌益が彼の生きた時代・社会といかに切り結んだのか、その葛藤の実像が見えてきた。本書では、こうして明らかとなった日本近世の特質とその歴史的位置をも論述した。

以下、本論文の構成にしたがって、内容を要約して示す。

序

はじめに

一九九〇年頃から日本史研究の思想史化ともいうべき状況が起き、近年、思想や文化への関心が高まっている。「序」では、このような状況下で、本格的な思想史研究を立ち上げるための、五つの基本的視角（本論文を貫く視角でもある）を提示した。

一 思想史とは何か——総合史としての構え

第一の視角として、思想史研究とは「人の意識・思想に焦点をあわせて歴史研究」であり、思想史研究を根幹に据えて、個別分科史研究（政治史・社会史・経済史・文化史・思想史等々）を総合する歴史研究を開始しなくてはならないことを指摘した。

二 社会通念・常識という視角

第二に、意識・思想の中でも広く社会に共有された「社会通念・常識」に着目し、社会通念・常識が

いかに形成・確立し、そして破綻したのか、その過程を解明することによって、時代・社会を描くことができる」と指摘した。

三 社会通念・常識の形成と書物——なぜ書物なのか

身分制社会である日本近世社会において、身分・階層の差異を越えて社会全体に共有される社会通念・常識が形成された理由として、領主層から民衆までに共通の情報を伝える情報媒体^{メディア}の存在を指摘した。すなわち日本の近世は、日本史上初めて商業出版が成立し発展し、版本と写本とが流通し読まれ書写された時代であり、書物が社会通念・常識の形成に大きく寄与したのである。このような書物への着目が、基本的視角の第三である。

書物の中でも、上層武士を対象に政治と軍事を説き明かすものだった『太平記評判秘伝理尽鈔』（『理尽鈔』）の講釈（「太平記読み」と呼ぶ）が、『理尽鈔』が一七世紀半ばに出版されたことにより（その享受層を飛躍的に拡大し）、領主層から民衆にまで享受されたことを指摘した。「太平記読み」が提起する明君＝楠正成や政治のやり方は、当代一流の学者をも巻き込みながら、当代社会の共通認識＝政治常識となっていくという仮説を、拙著『「太平記読み」の時代』（平凡社、一九九九）の成果に依りながら述べた。

四 安藤昌益の思想形成と書物

昌益の研究は、その思想がいかなる歴史的社会的規定を受けて形成されたのかを解明することから始めなければならない。そのため昌益の著作の一言一句に注目して、それを昌益が見ることが可能であった書物と比較対照する作業を忍耐強く行うことによって、昌益が確かに読んだ書物を掘り起こす。昌益の読書歴を解明できれば、昌益がその書物から何を学んだのか、何を継承し何を否定していったのかという昌益の思想形成の過程を考察することができる、と指摘した。本論文の第一章から第六章までの諸論考はその実践である。

また、近年、日本近世史研究は書物を重視するようになり、書物を組み入れて歴史を叙述できる段階に到達した。しかし書物の内容・思想までを分析した研究はなされていないことを指摘し、「書物の思想史」研究を提起した。これが第四の視角である。

五 思想形成を問う思想史

昌益の思想的基盤を発掘し、その思想形成を跡づけていくと、ぎりぎりのところで昌益が時代や社会といかに切り結んでいるのか、その葛藤の実像が見えてきた。昌益の時代や社会との葛藤をえぐりだすことを通して、昌益からみえる日本の近世を描けることが分かり、本論文を執筆したことを述べた。また、昌益に限らず思想家の研究に際しては、その思想的基盤を明らかにし思想形成過程を解明することが必要であるとして、本節では、「思想形成を問う思想史」研究を提起した。これが基本的視角の第五である。

第一章 昌益の学問否定の本質

本章では、昌益が学んだ学問はどのようなものか、昌益の著作の語句を分析することにより、明らかにしようとした。昌益の思想は、学んできた学問を「思想的基盤」としてそこから産み出されたものであるとして、この思想的基盤の掘り起こしを行った。

はじめに

本書が、儒書・仏書・韻学と昌益との関わりを解明しようとするものであることを述べた。

一 自然の世から法世へ

昌益が漢土（中国）の学問の始発とみなす易と、天竺の学問の始発とみなす仏教について、昌益がど

う論評しているか検討した。昌益によれば、易は聖人伏羲（伏羲）が天文・地理を把握すべく制作したもの、仏教は釈迦が心の動転を説き明かしたものであり、中国に仏教が伝わることによって、外は天文・地理から内は心の中まで乱れる乱世＝法世となったという。なお、本節では昌益が朱子著『易学啓蒙』を読んでいることを論証した。

二 中国における教宗の伝来と漢音・呉音・唐音

教宗（仏典により釈迦の教えを継承する）が中国に伝来すると、易や荘子思想と交流・交渉し、また漢字音（漢音・呉音・唐音）が成立したと昌益はいう。本節では、昌益のこの見解を、林希逸著『莊子庸齋口義』、馬場信武著『韻鏡諸鈔大成』等、昌益が読んだ可能性が高い書物と比較検討して、昌益の見解の学説上の位置を解明しようとした。

三 中国における禅宗の受容と禅録

中国に禅宗が受容される際に荘子思想が大きな役割を果たしたと昌益は述べる。本節では、この昌益の禅宗理解に、『莊子庸齋口義』が大きな役割を果たしたことを指摘した。

四 中国における韻鏡の受容

昌益が馬場信武著『韻鏡諸鈔大成』らの韻鏡解釈書を読んで『韻鏡』を理解していることを指摘した。

五 法世から自然の世へ

昌益が既成の韻学は口中の響きのみを考察して作られたと批判し、自然の韻道を説いていることを指摘した。また既成の諸学問（「私法」）を破棄すれば、「自然の世」になるという考えを昌益が持っていることを明らかにした。

むすびにかえて

本章の論点を整理するとともに、昌益にとっての既成の学問の系統（体系）を図示した。

コメント

本論文では、各章の最後に「コメント」と題して、それぞれの章の執筆の経緯について述べた（第二章以下も同様であるので、要約を略することとする）。

第二章 昌益の学問否定と秋田藩の農民政策

本章は、医者昌益が学んだ医学を明らかにするとともに、昌益が医学を根幹にして諸学問を体系的に整理していることを論述した。また昌益の学問否定の背景に、昌益が生まれ育った一八世紀前半の秋田藩農政の破綻があることを指摘した。

一 享保期の秋田藩と安藤昌益

享保期の秋田藩は財政破綻に直面し、仁政を標榜しながらも現実の「御恵」を放棄したため、村落全体の貧窮化・荒廃化が進行したことを指摘した。昌益が故郷を離れたのも、こうした状況下で手作地主経営が没落したことによると推定した。

二 本章の課題

学問の根幹に『内経』医学を位置づける昌益の学問観がどのように形成されたのか、昌益の主著で医書である刊本『自然真営道』の分析によって、それを解明していきたいと述べ、本章全体の問題提起をした。

三 『内経』理解の源泉

昌益が、張介賓による『内経』注釈書である『類経』を読んで、『内経』医学を学んだことを論証した。

四 張介賓の運氣論

『類経』を介して『内経』医学を学んだ昌益は、運氣論をその根本だとみなす。本節では、張介賓が十

干を五—十系列の生成論により、十二支を三—六—十二系列の生成論により論理づけていることを明らかにした。

五 昌益による運氣論批判

昌益は張介賓の五—十系列の生成論を継承するのに対し、三—六—十二系列の生成論については君臣の身分秩序の正当化論であると論じ、全面否定していることを明らかにした。

六 学問否定の論理

昌益は、諸学問はいずれも三—六—十二系列の生成論を踏襲した身分秩序正当化論だとみなし、諸学問を否定していることを指摘した。

むすびにかえて

昌益の思想形成の過程を『類経』受容の態度という観点から整理すると、『類経』を真摯に学んでいた段階から、『類経』を批判し克服していく段階への展開を想定できる。両段階の画期は、身分秩序を不当とする社会思想の確立にあることを指摘した。

第三章 天変地異の思想——昌益の天譴論と西川如見

本章では、昌益の初期の著作『暦大意』と、それを執筆する際に下敷きにした西川如見著『教童暦談』とを比較対照することにより、延享期の昌益の思想形成過程を解明した。また『暦大意』が、天変地異・大凶作により疲弊した八戸藩の領主層を対象とした政道書と推定されることを指摘した。

一 幕藩制社会と天譴論

1、本章の課題

昌益が思想形成の過程で対決せざるを得なかった思想として、天道思想がある。昌益における天道思想の受容と克服の有り様を解明するのが、本章の課題であると述べた。

2、天運か天譴か

天変地異が起きたときに、それを領主の悪政に対する天道の譴責とするか（天譴論）、天地の運気の運行により起きたとするか（天運論）の選択肢があった。如見は、天譴論が為政者批判に向かう危険性を察知し、すべての天変地異を天運だと説いたことを指摘した。

3、昌益の天譴論

昌益は、如見と対照的に、天変地異の勃発はすべて為政者への天譴だと説く。昌益の天運論は、当代の為政者だけでなく、為政者という存在を否定するものであると指摘した。

二 『暦大意』の研究

確龍堂正信の署名がある『暦大意』の語句を詳細に分析して、正信が『天文図解』・『史記評林』八尾再版本・『貞享暦』（『寛保四甲子暦』）・西川如見著『教童暦談』を参照しつつ、『暦大意』を執筆したことを明らかにした。

三 如見と正信・良中

『暦大意』の著者正信は、天譴論・概念装置・撰日への評価・暦の効用等、いずれも如見と対立する見解を持っていた。にもかかわらず正信は『教童暦談』を下敷きに、語句の補訂によりそこに自己の見解を織り込むという手法で自説を展開していた。ここから正信にとって『教童暦談』が、暦学知識の重要な情報源に止まらず、克服すべき書物であったこと分かる、と論述した。

他方、昌益は宝暦期に確龍堂良中という名で主著『自然真営道』等を著しているが、これを正信と比較してみると、概念装置・撰日への評価・暦の効用等においては両者はほぼ一致している。また『暦大意』の記述がそのまま良中の著作に利用されていることから、両者は同一人物であると推定した。正信

時代の昌益は、身分秩序を正当化する思想を持ち領主に仁政を要求していたのに対し、良中時代になると、領主という存在そのものを否定する、と思想が劇的に転換したことを述べた。

むすびにかえて

本章の論点を整理するとともに、『暦大意』の時代背景を述べて、当書が、慢性的飢饉状況下にある江戸藩の領主層に対して、仁政によってその危機を打開するよう提言した政道書であろうと推定した。また末尾に『『暦大意』典拠一覧』を付けた。

第四章 昌益の本草学—肉食をめぐる

本章では、肉食を人に本来のものではないとする昌益の肉食観がどこからきたのかについて、本草書の受容と、肉食を忌避する社会通念との関わり の両面から追究した。特に後者については、昌益が生きた時代が肉食忌避の社会通念が一般化した時代であったと論じ、政治から民衆生活までを射程に入れて、昌益の歴史的位 置を見定めようとした。

一 獣肉忌避と本草学

獣肉食の忌避が近世の社会通念となっていて、医者・本草学者香川修徳が薬物的観点から身体に良いと肉食を奨励したことは、社会通念と対決することであったことを指摘した。

二 本章の課題

昌益の生活圏である北奥羽地域でも肉食忌避は信仰と結びつき社会通念化していた。そして、昌益もまた獣肉は人の食物ではないと肉食を否定する。では、昌益は獣肉忌避の社会通念を継承したのであろうかと述べ、本章の課題を提起した。

三 昌益の学んだ本草学

昌益が李時珍編『本草綱目』と香川修徳著『一本堂薬選』を読んでいることを指摘した。

四 昌益の獣肉論

本節では具体的に、狗・鼠・狐・熊・鹿・羚羊・猪・獺・臘臍・牛について昌益がどう述べているか検討した。昌益が獣肉の薬効を認めそれを薬として利用し肉食を忌避していないこと、多食すると奇病に罹ると多食禁止を説いていることを明らかにした。

五 昌益の生物生成論

昌益は人の肉食を否定するときに生成論を根拠にする。人は穀から生まれたのであるから穀を食べる存在であり、獣肉は人の食物ではないという。昌益が「生物は食べているものから生じる」という法則を見出し、人、禽獣虫魚の四類、雑草の生成論を説いていることを明らかにした。

六 学問批判・社会批判の起点

昌益は穀から人が生じたとする生成論に依拠して、これを説かない既成の諸学問を全面的に批判している。また、世界中の人々は穀から生じた一組の男女の子孫であり、人の間に上下の差別があるのはおかしいと、既存の社会秩序を厳しく批判していることを述べた。

むすびにかえて

本章の論点を整理するとともに、今後の展望として、昌益がその生活圏の民俗をどう継承しどう克服していったのか、考察していく必要があると述べた。

第五章 延享期昌益の思想——『博聞拔粹』の基礎的研究

本章と次章を通じて、昌益の読書ノート『博聞拔粹』が、『太平記大全』の抜粹からなることを明らかにして、昌益が「太平記読み」の政治思想の影響下で思想形成をしたことを指摘した。「太平記読み」の

受容は、昌益だけに見られるものではない。近世前期において領主層から民衆までの広範な人々が、「太平記読み」を介して政治理念や具体策を学んでいたのであり、それは近世社会における政治常識の形成に寄与をしたことを、述べた。

はじめに

これまでの近世思想史研究が、思想形成の契機としての「地域」、思想的基盤としての「地域」という視点を欠落させてきたことを指摘した。

一 本章の課題

町医である昌益が、領主層向けの政道書『暦大意』を執筆するほど政治に強い関心を持ったのはなぜか、天道思想に基づく政道論をいかに形成したのか、という課題を提起した。

二 『博聞拔粹』の典拠

昌益の弟子の子孫宅で、『暦大意』と同時に発見された『博聞拔粹』を綿密に分析することによって、この書物の編者が昌益であること、昌益が『太平記大全』を読み進めながら抜き書きし、ときに自己の見解を述べてこの書物を完成させたことを解明した。

三 『博聞拔粹』の思想傾向

本節では、『太平記大全』が『理尽鈔』の全文を収録した『理尽鈔』の末書の一つであることを述べた。また、『博聞拔粹』から読み取りうる延享期の昌益の思想傾向を（後代のものと対比しながら）明らかにした。

四 昌益の天譴論的発想と『太平記大全』

本節では、昌益の天譴論的発想、政治への強い関心は、『太平記大全』の読書を通じて培われたものであり、「太平記読み」の政治志向を受けた可能性がある、と指摘した。

むすびにかえて

朱子の編著から朱子学を体系的に学ぶという方法とは別に、『太平記大全』から儒・仏・神三教に関する知識や政治思想を学ぶという学問の仕方が存在していることを強調し、そのような学問・思想形成の方法がどのような広がりを持つかという問題を提起して、本章を閉じた。なお、末尾に『博聞拔粹』典拠一覧を付けた。

第六章 昌益の思想形成と「太平記読み」

はじめに

「太平記読み」を軸に幕藩領主層・思想家・民衆の思想をトータルに扱う新たな政治思想史の構想に、昌益がどのように位置づくのかと述べ、本章の課題を提起した。

一 「太平記読み」における学と政治

「太平記読み」が、儒・仏・神の諸学問を「国家」に従属させ、国家のために民衆教化・教導にあたる存在として位置づけていることを明らかにした。

二 「太平記読み」と確龍堂正信

昌益は、確龍堂正信というペンネームを用いていた時期に、「太平記読み」の影響を色濃く受け、領主層に仁政を要請する身分制社会のイデオログであったことを解明した。

三 「太平記読み」と確龍堂良中

確龍堂良中の名で著した著作でも、『太平記大全』『太平記読み』の影響を見ることができる、と指摘した。

むすびにかえて

本章の論点を、Ⅰ昌益の思想形成について、Ⅱ新たな政治思想史の構想について、Ⅲ宝暦・天明期論

について、に分けて整理した。

終章 昌益からみえる近世社会

はじめに

これまでの六つの章で昌益が読んだ書物を掘り起こすことによって、昌益がその書物から何を学び、何を否定していったのか、考察した。その作業を積み重ねていくうちに、昌益が自らが生きた時代や社会といかに切り結んだのか、昌益の葛藤の実像が見えてきた。本章では、こうして見えてきた近世社会の像を述べた。

一 「太平記読み」思想史の現在——政治常識の形成と『太平記』

1 安藤昌益から『理尽鈔』研究へ——研究の軌跡

昌益研究を行っていた筆者が、『理尽鈔』を研究することになった研究の軌跡を述べた。

2 「太平記読み」の発掘——領主・思想家の「太平記読み」受容

「太平記読み」が提起する明君としての正成像が、一般（常識）化したことを指摘した。

3 「太平記読み」の読書——民衆の「太平記読み」受容1

『理尽鈔』が刊行されると広範な読者を獲得し、民衆自身の自己形成の論として読み替えられる等、「太平記読み」が提起する治者像は、武士層から民衆の上層までに共有されることになったと指摘した。

4 百姓一揆物語の形成——民衆の「太平記読み」受容2

一八世紀半ばに、全国各地で作られ始める百姓一揆物語には、内容から形式・表現様式まで「太平記読み」の影響をみることができる。一揆物語の歴史的意義について述べた。

小活

論点を整理し、小活とした。

二 近世人の主体形成と政治常識

1 書物の思想史——主体形成の契機としての書物

現代まで続く「書物の時代」の始期である近世の人々にとって、書物とは何であったか、近世人の主体形成に書物がいかなる役割を果たしたのかという課題を提起した。

2 軍書の歴史的位置

領主層～民衆上層にまで広く読まれた書物として、軍書と医薬・天文暦書がある。ここでは、『理尽鈔』が近世社会の政治常識の形成に寄与したことを指摘して、軍書の読書の歴史的位置について述べた。

3 医薬書・天文暦書の歴史的位置

医薬・天文暦書の読書がどのような歴史的意義を有するのか、分析した。

4 昌益の主体形成—政治常識との葛藤

近世の政治常識の破綻を宣告した人物である安藤昌益の思想形成に、軍書と医薬・天文暦書の読書がどのような役割を果たしたのか、本論文の六章までの研究成果に則りながら、論述した。

むすびにかえて——主体形成・政治常識・コスモロジー

本章の論点を、主体形成、政治常識、コスモロジーをキーワードにして、整理した。軍書、医薬書・天文暦書は、領主層から民衆までにもっとも広く一般的に読まれた書物であり、それを糧に思想形成した昌益は、思想的基盤という点では、決して孤立した思想家ではないことを指摘した。昌益がいかにして社会批判を行う独自の境地に到達することができたのか、その道筋を追跡して、本論文の締めくくりとした。

あとがき

現代を生きる歴史研究者として筆者が抱いている問題意識を述べるとともに、本論文完成までの歩みを振り返った。

論文審査結果の要旨

本論文は江戸中期の思想家安藤昌益をとりあげ、その思想形成の母胎となった諸学問と昌益の思想とを詳細に比較検討することによって昌益の思想の形成過程を跡付け、その思想の独自性を明らかにするとともに、それを近世史の文脈のなかに位置づけようとしたものである。

本論文は序の後に、一章から六章までの本論があり、終章で結ばれるという形式をとっている。

序では本論文を貫く基本的な視角が提示される。まず思想史研究は「人の意識・思想に焦点をあわせた歴史研究」であり、政治史・社会史・文化史などの個別分科史研究を総合するものでなければならぬ、とする。具体的には、社会通念・常識の形成過程を解明することによって、時代・社会の全体像を描くことができるとし、日本近世社会の場合、社会通念の形成に書物が重要な役割を果たしたことを指摘する。また昌益が書物から何を継承し何を拒否していったかを詳しく検討することによって、昌益と時代・社会とのあいだに生じた葛藤を究明していくことが本論における論証の中心であり、その作業を通じて「昌益からみえる日本近世」を描くことが可能になるとする。

第一章「昌益の学問否定の本質」では、その思想の形成過程がまったく知られていない昌益について、彼がどのような学問を学んだかを、その著作の語句を分析することによって明らかにしようとする。昌益の使用する語句の分析を通じてその思想と儒書・仏書・韻書との具体的な関係が指摘されるとともに、昌益が既成の学問を民を支配するためのイデオロギーとして否定するに至る、そのメカニズムが論じられる。

昌益が朱子の『易学啓蒙』、及び馬場信武の音韻解釈書を読んでいたという指摘は、本章の重要な成果である。

第二章「昌益の学問否定と秋田藩の農民政策」は、医師としても活動する昌益が学んだ医学の内容を明らかにするとともに、彼が医学を根幹に据えて諸学問を体系的に整理していることを論述する。昌益が『内経』の注釈書である『類経』を通じて医学を学んでいたこと、その思想形成の過程として、『類経』を真摯に学んでいた段階から、それを批判的に捉え克服しようとする段階への展開を想定できると、などが論じられている。

第三章「天変地異の思想——昌益の天譴論と西川如見」では、『暦大意』が昌益の初期の著作であることを実証するとともに、それを執筆する際に下敷きにした西川如見の『教童暦談』と比較対照することにより、延享期の昌益の思想形成過程を解明しようとする。また『暦大意』が、天変地異・大凶作により疲弊した江戸藩の領主層を対象として、仁政によってその危機を打開することを提言した政道書であると推定する。

昌益の『暦大意』と如見の『教童暦談』は、天譴論の解釈をはじめ多くの対立する見解をもっていたにもかかわらず、昌益は『教童暦談』を下敷きにして、語句の補訂によりそこに自己の見解を織り込むという手法で自説を展開したとされる。また、領主の存在そのものを否定する『自然真営道』に対し、『暦大意』の段階では昌益はまだ身分秩序を正当化する思想をもち、領主に仁政を要求していたことが論じられる。

第四章「昌益の本草学——肉食をめぐる」では、肉食が人間にとって本来的なものではないとする昌益の肉食観が何に由来するかについて、本草書の受容と、肉食を忌避する社会通念との関わり的一面から追及する。特に後者については、昌益が生きた時代が肉食忌避の社会通念の一般化した時代であったと論じ、そのなかでいかにして昌益が独自の肉食観を形成することができたのかを考えることによって、昌益の歴史的位位置を見定めようとする。

昌益が学んだ本草書を具体的に確定したことは、本書の重要な成果である。また昌益の肉食否定が、人は穀から生まれたものであるという独自の生成論に依拠していることを指摘している。

第五章「延享期昌益の思想——『博聞拔粹』の基礎的研究」は、昌益の読書ノートである『博聞拔粹』が『太平記大全』の抜粹からなることを明らかにした上、昌益が「太平記読み」の政治思想の影響下で思想形成を成し遂げたことを指摘する。近世前期においては領主層から民衆まで広汎な人々が「太平記読み」を介して政治理念や具体策を学んでいたこと、それが近世社会における政治常識の形成に寄与したこと、昌益の天譴論的発想や政治に対する強い関心も「太平記読み」の系譜に位置づけられる『太平記大全』の読書を通じて培われたものであり、「太平記読み」の政治志向を受けた可能性があること、などを論ずる。また江戸時代には朱子学などの学問を体系的に学ぶという方法以外に、『太平記大全』から儒仏道三教に関する知識や政治思想を学ぶという学問の仕方が存在したとし、そうした学問のあり方を解明していくことの重要性を強調する。

第六章「昌益の思想形成と「太平記読み」」では、「太平記読み」を軸に幕藩領主層・思想家・民衆の思想をトータルに扱う新たな政治思想史の構想が論じられるとともに、そうした大きな見通しのなかに昌益の思想がどのように位置づけられるかが論述される。「太平記読み」が儒・仏・神の諸学問を国家に従属させ、国家のために民衆教化にあたるべき存在として位置づけていたこと、初期の昌益は「太平記読み」の影響を色濃く受け、身分制社会のイデオログであったこと、などを指摘する。

終章「昌益から見える近世社会」では、書物の受容を通じて昌益が同時代の社会や思想と如何に斬り結んだかを具体的に考察した第一章から第六章までの成果を踏まえて、そこから見えてくる近世社会の像について述べる。『太平記大全』など同時代の領主層から民衆まで広く読まれた書物を糧にして思想を形成した昌益は、思想的基盤という点では決して孤立した思想家ではなかったことを指摘した後、昌益が如何にしてそこを抜け出して厳しい社会批判の視座を獲得していったかが論じられる。

現地調査などを通じて昌益が読んだと推定される書物を丹念に掘り起こし、詳細な対比によって昌益の思想に対する影響を指摘する論証はまことに重厚であり、数々の新知見を提示している。また近世社会での書物の流通と社会常識の形成を踏まえ、個々の思想をその文脈に位置づけることによって、その歴史的位位置を解明しようとする本論文の方法は、思想史の新たな方法論の試みとしても注目に値する。

個別の議論にやや荒さを残す部分もあるが、独自の方法に基づき広い視野に立って独自の安藤昌益像・近世思想史像の構築を試みた本論文の成果は、斯学の発展に寄与するところ大なるものがある。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。